

## 赤とんぼ そして 埴生の宿

子どもの頃にラジオで聴いた落語の中に、「有崎勉 作」と作者の名前を添えた噺が沢山あった。落語家（元落語家と言った方が正しいのかも）の柳家金語楼が作った新作落語だった。

有崎勉は柳家金語楼のペンネームで、彼が作った新作落語は古今亭今輔や春風亭柳昇などにも提供された。一部の落語は今でも語られており、「新作落語」とは言っても、令和の時代から見れば80年前の噺で決して「新しい噺」でもない。

あと20年も経てば、100年の歴史を持つ「準古典落語」と言ってもおかしくない。「古典落語」「新作落語」と名付けて区分することが正しいとも言えないのではないか。

六代目桂文枝（元 桂三枝）も約300の新作落語を世に送り出しており、傑作と言えるものも多い。その中のひとつである「赤とんぼ」を紹介しながら、多少の私見を交えて見ることにした。

有る会社に勤める「高野」というサラリーマンが、この噺の主人公。北海道の支店から本社に転勤してきたばかりの高野は、新しい職場で仲間から忠告を受ける。

「この会社では童謡に気をつけろ」

ある日、トイレで用を足しているときに思いがけず童謡の一節を口ずさんでしまう。これを偶然居合わせた部長に目撃されてしまい、事件が起きる。

この後の出来事を事細かく書いてしまうと、「ネタをばらした」だけになってしまうのでここで止めておくが、この後の舞台上に数多くの童謡が登場して主人公以上の働きをする。

懐かしい「童謡や唱歌」を歌うコーラスサークル活動が高齢者の間で静かなブームになっており、この年代の方々がこの落語を見る（聴く）と高座上の演者と一体感が増すようで、観客席の満足度がかなり高くなるのもこの落語の特徴のひとつである。

噺の中に登場する歌は「音楽」として登場するばかりでなく、その作詞者・作曲者や背景にまで踏み込んだものでなかなか興味深い。

「どんぐりころころ」は、青木存義（あおきながよし）が作詞した七五調四行詩の歌で、二番まである。

ところが、後の世で岩河三郎が三番の歌詞を作って「歌詞の持つストーリー性」にひと味加えたという事実が落語の中で紹介される。

桂文枝は、ここへさらにひと味加えて、岩河三郎のもうひとつ上に行く。

そして数多くの童謡や唱歌が紹介された結果、終曲として「埴生の宿」が選ばれる。

埴生の宿も わが宿  
玉のよそい うらやまじ  
のどかなりや 春の空  
花はあるじ 鳥は友  
おーわが宿よ たのしとも たのもしや

明治22年に作られた中等唱歌集の中の一曲で、ヘンリー・ビショップ郷が作曲した原曲「Home sweet home」に里見義（さとみただし）が作詞をした。今や題名の「埴生の宿」という言葉の意味を解する人も少なくなったところへ、歌詞全体の意味となったらどのぐらい理解され伝承されているのかは推して知るべしというところだろう。落語の中でも紹介されるのだが、「埴生の宿」は「ビルマの豎琴」という映画で重要な役割を果たす音楽として使われている。この映画は、市川崑監督が1956年と1985年の二度世に送り出している。





一度目の主演は安井昌二、二度目の主演は中井貴一だったが、幅広い世代に受け入れられる結果となっている。(左画像:安井昌二版「ビルマの豎琴」)

原作の「ビルマの豎琴」は、竹山道雄が第二次世界大戦を舞台にして児童向けに書いた話(童話)で、この童話を連載したのが「赤とんぼ」という児童向けの雑誌だった。そして、新作落語「赤とんぼ」の舞台となっているお店の名前が「童謡酒場 赤とんぼ」。こんなこともわかってくると、この落語の奥深さが感じられ、興味も一層増してくる。

以上